優秀賞

変わらないもの

福岡県立嘉穂高等学校三年（福岡県）
嶋田　楓

「和敬清寂」

今日はこの掛け軸がかかった茶室で、私たち茶道部のお稽古が始まる。今日のお花は何だろうか。今日のお菓子は何だろうか。毎週月曜日、そんな風にわくわくして茶室に入ると、いつも素敵なお花や掛け軸が私たちを迎えてくれる。

しかし、数年前とは少し景色が違う。新型コロナウイルスの感染拡大により、お点前をする人も、席入りする人も、みんながマスクをつけ、感染対策をするということが、当たり前の世の中になってしまった。そんな、思うように活動ができず、変化の激しい時代の中でも、茶道は私に大切なことを教えてくれた。

私が茶道に出会ったのは中学二年生の時。

「薄茶一服さし上げます」

という挨拶で始まり、

「失礼いたしました」

という一言で締めくくられるお茶の一席に入ったその時から、私は茶道の魅力にみるみるうちに引き込まれていった。初めてお点前をしてもらった後、私はとても優しい気持ちになっていた。これは、五年経った今でも変わることはない。お点前をしてくれた人はもちろん、お菓子を運んでくれた人、お茶を運んでくれた人、みんなに対しての、「ありがとう」という気持ちでいつも心が温かくなる。地域での茶道を通じた活動でも同じだった。関わる人、一人一人の温かさを感じられる茶道が、私は大好きだ。

そんな地域の人たちとの関わりも、感染拡大によって思うようにはできなくなった。でもその分、茶道部という小さな空間の中で、周りの人の優しさを感じることが多くなった。茶道の先生は、毎週必ず私たちのお稽古のために足を運んでくれる。部員のみんなは、道具の準備や片付けを当たり前のようにしてくれる。そんな周りの人の優しさを感じ、感謝の気持ちでいっぱいになる。どんな状況であっても、いつも誰かの優しさがすぐそばにある、それこそが茶道なのだと気づくことができた。

「茶室は五感で感じる場所だ」

と、私は思う。掛け軸やお花、抹茶の色を楽しむ視覚。抹茶や畳の匂いを感じる嗅覚。お点前の音を聴く聴覚。お茶を飲み、茶碗を触って感じる味覚と触覚。何百年も昔の人

も、こうして茶道を楽しんできた。空間を感じながら茶席に入る。いつもは目を向けない小さなことを五感でフルに感じることができる。それが茶道の魅力だ。何もかもが規制された今の世の中でも、茶道をしている時間だけは嫌なことを忘れられる、そんな気がした。

新型コロナウイルス。それは私たちの活動の場をどんどん奪っていった。しかし、そんな中でも、茶道には変わらない美しさがある。この感染症は憎い。でも、こんな茶道の素晴らしさに気づかせてくれたこと、この点だけは感謝しようと思う。

茶道の姿は変わらない、きっとこの先も。だって、四百年以上もその姿を保ってきたのだから。そんな茶道の魅力を、日本中の人に、世界中の人に知ってもらいたい。

「薄茶一服さし上げます」

この一言がずっと響き続ける世の中でありますように。